

平成29年度
企画展

荒川区文化財保護条例制定35周年記念 「下町の名宝展 ～あらかわの有形文化財～」開催



旧上野の黒門の修理（昭和60年）



文化財保護審議会による
無形文化財の調査（平成28年）

平成29年度 荒川ふるさと文化館企画展 荒川区文化財保護条例施行35周年記念

下町の名宝展

あらかわの有形文化財

【会場】荒川ふるさと文化館1階企画展示室

平成29年10月28日(土)～12月3日(日) 9:30～17:00(入館は16:00まで) 月曜日休館

荒川ふるさと 文化館だより

荒川区教育委員会
荒川ふるさと文化館
荒川区南千住6-63-1
TEL.03(3807)9234
登録(29)0043号

郷土の文化財を守る 荒川区は、文化財保護条例施行35周年を迎えました。この条例の誕生の背景には、地域の人々と郷土史の会である荒川史談会のみなさんの熱心な活動がありました。昭和52年度（一九八一）から、荒川史談会の会員を中心とした伝統技術の番皆調査が行われ、その成果を紹介する催しとして、同56年3月、第一回あらかわの伝統技術展が開催されました。当時、区内の文化財保護に対する関心は徐々に高まりつつあったのです。

芭蕉の碑と上野の黒門 文化財保護条例制定の契機のひとつは、素蓋雄神社（南千住六丁目）の「松尾芭蕉の碑」。戦火に罹り、碑面の状態の悪化が問題となっていました。そしてもうひとつは、上野から移築された円通寺（南千住一丁目）の「旧上野の黒門」でした。材木が朽ち果て、すぐにでも倒壊しそうな有様でした。同56年7月、建築史の専門家の文化財診断により、黒門の歴史的な価値とその修理の必要性が提言されました。このことで条例制定の機運はさらに高まり、翌57年3月、有形・無形のあらゆる文化財を保護するため、荒川区文化財保護条例が制定され、同10月に施行されたのです。そして、同58年度「松尾芭蕉の碑」と「旧上野の黒門」は、荒川区指定文化財となり、同59年度に「松尾芭蕉の碑」、翌60年度に「旧上野の黒門」の本格的な修理が実施されました。

以来、区内各地の文化財の調査を実施し、保護・普及に関する様々な取り組みを行い、これまでに、257件の有形・無形の文化財を区登録文化財とし、そのうち特に重要なもの59件を区指定文化財として保存継承を図ってきました。

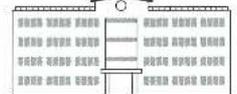
下町の名宝展 この秋、荒川ふるさと文化館では、文化財保護条例35周年記して「下町の名宝展～あらかわの有形文化財～」(会期10月28日(土)～12月3日(日))を開催し、これまでに公開の機会がほとんどなかった彫刻・絵画・歴史資料・古文書・有形民俗文化財等を実物展示します。あらかわの町と人が伝承してきた貴重な文化財を通して、荒川区の歴史・文化のすばらしさに触れ、郷土愛とともに、文化財保護への理解を深めることができるでしょう。ご期待ください。

〈野尻かおる〉

わが母校の宝物

ご存知、 荒川遊園の絵葉書

1

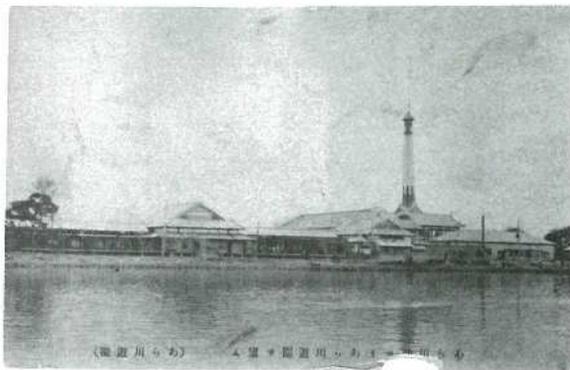


荒川区立尾久西小学校の資料室には、昔の暮らしの学習等に使う生活資料のほか、地域の資料が飾られている。その中に、創立30周年を記念して卒業生から寄贈された10枚の絵葉書と2枚の写真を貼り込んだパネルがある。内、5枚の絵葉書は、色褪せてはいるが、これまで知られていなかった貴重なあらわ遊園の絵葉書である。こうした絵葉書からは、当時の遊園の様子だけでなく、何が見どころとして推しだされていたかもうかがえる。

①「園内あら川稲荷」 かつて遊園の中にあつたお稲荷さんで、昭和24年（一九四九）、荒川区に移管される前後に作られた「荒川遊園平面図1/600」（公



①「園内あら川稲荷」



②「あら川池ヨリあら川遊園ヲ望ム」



④「大瀧上ヨリ本家茶屋ヲ望ム」



⑤「園内大瀧」



③「龍宮殿」

益財団法人東京都公園協会蔵)には、「遊園神祠」とされている。遊園の鎮守であろう。マネキ(手拭の様な小旗)や鳥居などが奉納されており、お稲荷さんが信仰を集めていたことがうかがえる。

②「あら川池ヨリあら川遊園ヲ望ム」/③「龍宮殿」 隅田川(旧荒川)側から、撮影したもの。横長の建物は、本家茶屋という大広間。隅田川と池に面して立地しており、水辺の風景を楽しめた。当時の尾久には、川沿いに料亭が数軒あつた。右奥のタワーには

龍宮殿という。煉瓦工場時代の建物と煙突を再利用したという証言もあるが、裏付けは取れない。パノラマ館・演芸場などが置かれた。

④「大瀧上ヨリ本家茶屋ヲ望ム」 遊園には、敷地の三分の一はあるかという池があり、本家茶屋はこっちにも面していた。池の水は隅田川の水を利用したといわれる。池にはボート乗り場があり、よく見ると、ボートで中洲に乗り付けている。中洲には鶴が8羽見えるが、動きが感じられない。造り物か。

⑤「園内大瀧」 滝は納涼スポットであり、都市には人工的に造られるものも少なくなかつた。大瀧は、実は、川沿いではなく、遊園の南側にあり、古老の回顧談「石神寅松氏記録」によると、遊園を開園するにあたって、木扉を煉瓦扉にして土盛りして滝を造つたという。これが正しければ、遊園周辺の煉瓦扉は、大瀧の遺構でもあつたことになる。その煉瓦扉は今日、地域の優れた景観として、保存が望まれている。

〈亀川泰照〉

収蔵庫のイッポン

七品目

尾久村庁舎の棟札と 新庁舎建設

今回、新収資料の尾久村庁舎の棟札（写真1）についてご紹介いたします。棟札とは建物の棟上げの時に工事の年月日、大工、建主などを記し棟木に打ち付けた札のことをいいます。尾久村長を務めた三橋家に伝来したものです。

棟札の表面には、大正2年（一九一三）6月16日上棟、裏面には、建主として当時の村長・三橋周之助、助役・楠木氏香、収入役・鈴木重三郎、他4名の建築委員、更には大工頭領・戸田権之助の名前が記されており、尾久村役場の新庁舎上棟の際の棟札と思われれます。



写真1 尾久村庁舎の棟札



写真2 尾久町庁舎（『市郡併合写真帖』所収）



写真3 荒川郵便局（『目で見える荒川区50年のあゆみ』所収）

新庁舎建設の経緯 尾久村役場は、上尾久二六七五番地（現東尾久八丁目）の当時の尾久小学校敷地に隣接していたようですが、大正2年5月に尾久村長から東京府知事に「役場位置変更認可申請」（東京都公文書館蔵）が提出されました。日々の執務を行う上で手狭になったのが理山のようなのです。改築・拡張しようにも、校舎と接していて支障があるため、熊野前停留場が近くて交通の便がよく、村の中央に位置する上尾久二六三〇番地（現東尾久五丁目）に移転の上、新築することに決定したようです。

庁舎が手狭になった背景としては、尾久村の人口増加が考えられます。「新興の尾久町」の統計によれば、明治5年（一八七二）に一、四〇八人であった人口が大正6年には三、四二二人と2倍以上に増加しています。江戸時代までの尾久は農村でしたが、近代以降、煉瓦工場や発電所の建設、王子電気軌道（現、都電荒川線）の開通、寺の湯の開業、三業地の発展など、急激に開発が進んだことが影響したのでしょう。

その後の庁舎 村庁舎は大正12年の町制施行以降も、引き続き町庁舎として使用されました（写真2）。パルコニーのあるモダンな外観が印象的です。

昭和7年（一九三二）には尾久町が周辺の町と合併して荒川区となり、建物は庁舎としての役割を終えましたが、その後は荒川郵便局（昭和18年まで本局、同27年まで分局）としての役割を果たしました（写真3）。この建物を、昔見たことがある方も「郵便局」と記憶している方が多いかもしれませんね。棟札は、郵便局の建物を解体した時以来、三橋家が保存してきたそうです。新たに見つかった棟札は、文書や写真以外にも尾久の近代史を物語る新たな要素となることでしょう。

（澤田善明）

あらかわの記念碑

其の3
遊女小夜衣をめぐる
供養塔と物語

南千住の日慶寺の供養塔 千住大橋からほど近い一角に圓心山日慶寺という日蓮宗の寺院があります。寺の門をくぐり本堂右手のしげみの中にあるのが、遊女小夜衣の供養塔(写真1)です。真ん中には大きく「秋露妙眠信□」と戒名が刻まれ、「新吉原町

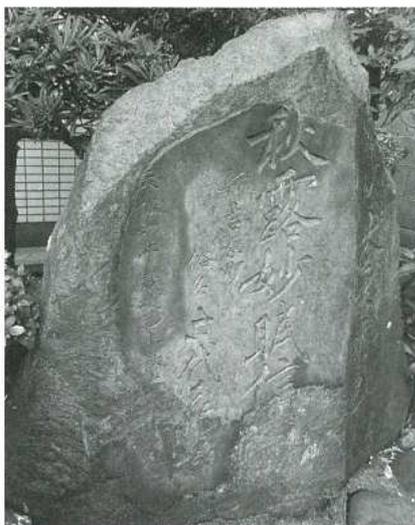


写真1

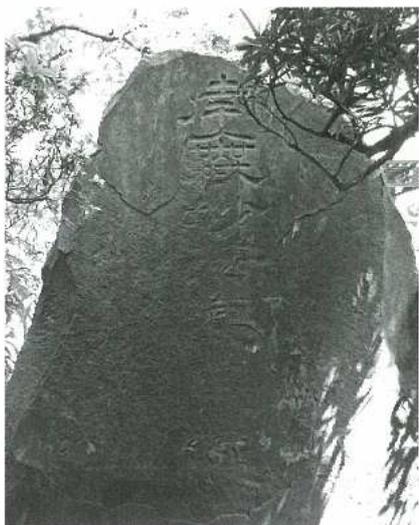


写真2



写真3 『埋木花』(国立国会図書館蔵)

俗名「さ代崑ぬ」とあり、同女の死を哀れんだ「大乘講中」が「天保六年歳乙未秋七□」に建てたと考えられます。裏面(写真2)は多くが剥れ落ちてはいますが「南無妙法華経」の題目が刻まれています。新吉原は、明暦の大火(二六五七)後に日本橋から現在地に移転した遊廓です。遊郭は江戸時代を通して家事が頻発しました。天明元年(一七八一)の新吉原の大火で小夜衣は火刑に処せられ、「小夜衣火事」とも呼ばれています。この供養塔の建立は、単に菩提を弔うだけではなく火事の原因とされた遊女小夜衣への関心を集めたからではないでしょうか。

墓所録『埋木花』にみる供養塔 話は変わりますが、『埋木花』という書物があります。太田道灌の墓など有名な人物の略歴・墓石スケッチが4冊にわたってつづられた墓所録ですが、その中に南千住の日慶寺にある「遊女小夜衣の墓」というページがあります(写真3)。

これによると正面の「南無無法蓮華経」の左右に「たちわたる身のうき雲も晴れぬべし おえぬ御法のわしの山かせ」と歌が刻まれていたことが分ります。また、後ろ側には、「秋露妙眠信女」と彫られていたとあり、現在の供養塔は本来とは逆に配置さ

れているようです。「本堂前根府川石四尺」とは1.2mぐらいの根府川石(神奈川県小田原市根府川に産する輝石安山岩)を意味します。

同じような墓所録である山口豊山編『夢跡集』名婦之部にも日慶寺の「遊女小夜衣墓」の紹介が存在することを考えると、小夜衣は名の知られた遊女であったことがわかります。

「小夜衣草紙」 遊女小夜衣の名前は、江戸時代が終わっても途絶えることなく、怪談の登場人物として語り継がれていきます。客の不実を恨んで自害した遊女小夜衣の亡霊が復讐をする物語「小夜衣草紙」の人物となっていくのです。

例えば物語の中では、蛤の吸物に関する怪異が登場します。現在でも婚礼の料理には、尾頭付きの肴と蛤の吸物を出しますが、材木問屋の若旦那・浜田源次郎の婚約を恨んで死んだ遊女小夜衣の亡霊が、女中に化けて婚礼当日の蛤の吸物を宴席に運ばせず、別室に運んで(その数28膳!)全て食べて空にしてしまうという場面が見所です。

巻き起こされる事件の数々について詳しく知りたい方は、大正5年(一九一六)の「怪談小夜衣 吉原奇説」(春風亭柳条講演)などをお読みください。最終的に老僧のご利益により亡霊は消滅します。この「小夜衣草紙」は講談・落語・浪曲・新派の劇など様々な場で語られ、人々の間に小夜衣の物語が広まっていくこととなります。いつの時代も不憫な死に方をした人物の姿に人は引きつけられるということかもしれません。

荒川区は、浄閑寺の新吉原総霊塔など新吉原の遊女とは縁深い浄閑寺にも小夜衣地蔵があります。この供養塔も著名な遊女を語り継ぐ一つの例ではないでしょうか。

〈高柳吟音〉



もう一匹の大緋鯉

千住七不思議異聞

千住七不思議と大緋鯉 かめのま・片目の大緋鯉・

横の屋のおぢ・片葉の葦・子福さま・金蔵寺のそばえんま・おいてけ堀。そう千住七不思議である。今日も、私たちの関心を惹いて止まない。但し、今回はタイトルの通り、大緋鯉を話題にしたいので、興味のある方は、昭和30年(一九五五)の『足立区史』などを紐解かれない。もっとも「七不思議」と七つのかくりで紹介するのは、この本より前に週報のない。横の屋のおぢと大緋鯉については、明治43年(一九一〇)の『東京近郊名所図会』一に載っている

ので、どこかの時点で七つに束ねられたのだろう。

では、同書に載る大緋鯉の姿を紹介しておこう。野村某の祖母が、洪水の際に、荒川(現隅田川)を見ていたところ、水面がたちまち赤くなった。これは何だと驚いていると、尾ひれを翻し、大きな頭が水面から覗いた。見れば、「一大赤鯉」であった。この鯉は片目であるといわれ、かつて凶暴な船夫が鳶口を打ちこんだためであるという。

二匹の大緋鯉 安政7年(一八六〇)の随筆、石塚豊芥子著「珍説正話多話戯草」(「演劇文庫」一、演芸珍書刊行会、一九一四年)に、これとは若干異なる大緋鯉の話が載っている。

女形の歌舞伎役者、松本小三郎は、いたずら者で、釣りや投網が大好きだった。ある夏の日、田船に乗って、隅田川の長命寺(墨田区向島五十四、四)の方へ、鱧を釣りに行った。その時、4尺(約1.2m)の緋鯉が掛り、出船を操作しながら、格闘し、気付けば船番所の辺りまで出ていた。この頃

には緋鯉も大分弱っていて、糸を手繰り寄せると、水面が真っ赤になり、5尺(約1.5m)足らずの緋鯉が表れた。さすがの小三郎もびっくりして、引き上げることもできず、じつとしてみると、緋鯉は小三郎の姿を一瞥した後、ひと跳ねして糸を切って水底深く潜っていった。

数日後、小三郎は、また長命寺辺りで釣りをしていた。今度は、釣竿に35尋(210尺。約63.6m)の極上の釣糸に鈴の仕掛けをつけて臨んだ。待乳山の日暮れの鐘が鳴り、鱧を釣るのによい時刻となった。固唾を呑んで待っていると、手応えがあり小三郎はここぞとばかりに中腰で、糸を手繰り寄せた。すると糸が来るので、不思議に思っていたところ、1問(約1.8m)余はあるうかという大緋鯉が水上に跳びあがった。その瞬間、尾ひれで小三郎の脇腹をひっぱたき、川へたたき落とした。小三郎は、河童のような泳ぎ上手でもあったので、難なく田船に這い上がって、浅草山の宿の釣り船屋で休んでいたが、ひっぱたかれた痛みは、段々強くなり、30日ほど彼を悩ましたという。ちまたでは、小三郎が、雌の緋鯉を釣って苦しめたので、雄がその報復をしたのだろうと噂した。

豊芥子の解説では、鐘ヶ淵辺りには、雄雌2匹の大緋鯉がいて、「主」といわれており、吾妻橋より下流へはいかず、満潮の時には、山谷堀の出口や浅草聖天町の中洲で時々見かけたという。

さて、この大緋鯉は、千住七不思議の大緋鯉と同じ緋鯉なのか? まず出現場所がやや異なり、千住大橋よりやや下流である。また、雄雌2匹ということも違う。そして何より片目ではない。千住周辺の人びとが、この伝承を取り入れ、語り伝えたのだろうか? それとも大緋鯉の片目が千住大橋の方まで泳いできて、千住の材木問屋の筏乗りが片目を



平成25年撮影 南千住第二中学校の大緋鯉 (荒川区立南千住第二中学校HPより転載)

やられたのか? 今となっては定かではない。

もう一匹の大緋鯉 21世紀に入り、片目の大緋鯉が再び南千住に出現した。南千住第二中学校の生徒が製作したハリボテの大緋鯉だ。平成25年、河童のお面を付けた生徒たちによって千住大橋のたもとまで担がれていって、作成に携わった生徒が、隅田川の水で溶いた暴で目を入れた。これは、南千住中心に隅田川周辺に伝わる妖怪伝説や言い伝えを掘り起こし、発信しようという「隅田川妖怪絵巻プロジェクト」の一環で製作された御輿で、今では千住大橋の主の大亀や大蛇(横の屋のおぢ)もいて、同中学校1階ホールに飾られて、文化祭の時に担がれている。生徒からイメージを募集し、妖怪造形作家天野行雄氏の監修のもとデザインされて、3年サイクルで生徒たちが衣替える。鱗の裏には、全生徒の願い事が書かれているとの由。新造すると、目を入れるため、千住大橋へと繰り出す。次の大緋鯉の衣替えは、平成31年。衣替えた大緋鯉に逢えるかもしれない。

〈亀川泰照〉



受章おめでとうございます！

田中清介(金切鋏)〔黄綬褒章(労働分野)〕

この度、区指定無形文化財保持者田中清介さんが五月に春の黄綬褒章を受章されましたのでご紹介いたします。この受章は技術の高さ、後身の育成、技術の公開・普及で特に優れた業績があったことを認められたものです。

田中さんは、板金工の専門工具である金切鋏を製作しています。刀鍛冶の流れを汲む伝統的な総火造りの技法を用い、作り上げる金切鋏は、すばらしい切れ味で、業界内から高い評価を得ています。

東京金切鋏工業組合(※平成15年解散)会長、東京刃物工業協同組合常務理事を務め、若い職人たちに技術指導・経営の助言等を行いました。また、あらかわの伝統技術展では総火造りの実演など、金切鋏の技術の公開・普及に尽力してきました。



「あらかわ座」を見て、聞いて、体験 あらかわ伝統工芸ギャラリー

「あらかわ座」って？ あらかわ伝統工芸ギャラリーがオープンして5ヶ月あまりが経ちました。ここでは職人さんの作品展示は勿論のこと、職人さんの技を間近で見られる「実演」、技を体験する「ワークショップ」を行っています。

実演とワークショップは、月に一度「あらかわ座」と銘打って開催しています。これまで行った木版画摺、つまみかんどし、鍍金、のれん染等のワークショップでは、みなさん真剣に、そして楽しく体験していました。

また、夏休み期間中には、子ども向けワークショップ「あらかわ職人道場」もギャラリーで行いました。額縁の技術での写真立て作り、指物の技術を使った箸づくり、手描友禅の技を使い和紙に色をさしていく体験がそれぞれ行われ、夏休みの宿題用にと一生懸命作る子どもたちや親子でチャレンジする姿が見られました。参加者が、すぐ側で実演中の職人さんの説明を聞いたり、質問もしました。

職人さんの高度な技に触れることができ、作品のすばらしさ、使う道具の工夫を知ることができます。「あらかわ座」は来場者の伝統工芸への興味を広げる貴重な場となっています。

ギャラリーは荒川区伝統工芸技術保存会の職人さんと協働で運営しています。また、若手の職人さんたちにも協力をいただいています。伝統工芸の魅力をさらに発信できるように企画していきますので、今後もお楽しみに。



6月の「あらかわ座」の様子

【今後の「あらかわ座」の予定】

10月29日(日)

●ワークショップ「漆を磨いてストラップを作ろう」
漆塗(角光男)

・時間 (1回20分) ①午前11時～11時20分 ②午後1時半～1時50分

・人数 各5人・参加費700円

●実演 犬張子(田中作典)

・時間 午前10時半～午後2時半(昼休憩あり)

11月25日(土)

●ワークショップ「夢二の作品を摺ってみよう」
木版画摺(松崎啓三郎)

・時間 (1回20分) 午前5回:午前10時20分～正午、午後5回:午後1時半～3時20分

・人数 20人(1回2人)・参加費500円

●実演 木版画摺(松崎浩繁)

・時間 午前10時20分～午後3時半(昼休憩あり)

12月3日(日)

●ワークショップ「提灯に文字をかこう」
提灯文字(前森宏之)

・時間 (1回60分) ①午後1時～2時 ②午後2時10分～3時10分 ③午後3時20分～4時20分

・人数 12人(1回4人)・参加費500円

●実演 指物(渡辺光)

・時間 午前10時半～午後4時(昼休憩あり)

*ワークショップは事前申込み制です。詳細はホームページをご覧になるか、お問い合わせください。

計報

●荒川区指定無形文化財(工芸技術・桐箱)保持者、関根英氏(享年91、西日暮里)は、去る平成29年4月12日に逝去されました。

●荒川区指定無形文化財(工芸技術・仏壇)保持者、飯岡時三郎氏(享年94、町屋)は、去る平成29年8月5日に逝去されました。

謹んでお二方のご冥福をお祈りいたします。